

被災者によるボランティア活動の意義

～東日本大震災被災後における岩手県陸前高田市での 絵本読み聞かせボランティアメンバーの活動から～

小木曾隆臣*1 山田武司*2

1. 研究の背景と目的
2. 研究対象と方法
3. 倫理的配慮
4. 結果
 - (1) なぜ読み聞かせ活動を再開させようと感じたか
 - (2) 再開後、活動が継続できているのはどうしてか
5. まとめ
6. 結語

1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北沿岸部を中心に甚大な被害を及ぼした。時間の経過とともに、多くの被災者が避難所から仮設住宅等に移行し、コミュニティの弱体化が懸念されるなど、被災地での生活は先の見通しが不透明な状況に置かれている。その一方で、被災者を含む被災地の住民の中にはその地でボランティアに取り組む動きもみられる(復興庁2012)。その一例として、仙台市では、震災で半壊した伝統工芸「堤焼」窯元のばらばらになったれんがを拾い集め、汚れを落とし修復を目指す市民ボランティアが2011年7月より進められている(『河北新報』2012年4月14日)。川市、木村ほか(2009:101)によると、「ボランティア活動には、ボランティア活動者の生活が安定していることが必要条件」としている。しかし、現実には、仮設住宅で暮らすなど決して安定しているとはいえない被災者が、ボランティア活動に取り組んでいるのはなぜなのであろうか。

被災地におけるボランティアの取り組みに関する先行研究では、阪神大震災に際して、震災以前から存続している9つの既成団体のボラン

ティア活動の展開について聞き取り調査を行ったハツ塚(1997)、被災者の数によっては心のケアを専門とするボランティアに加え、その養成を行うプログラムも必要であるとする榎島(2002)、学生の学びの場としてのボランティア活動に対する教育的な意義付けを行った茶屋道、筒井(2012)ほか、さまざまなものがあるが、被災地の人たちが被災後に活動するボランティアに関しての研究はあまりみられない。2000年の三宅島噴火災害において、三宅島の島民とともにボランティアの実践について報告した関野(2001)は、島民自身が支援ボランティアに主体的に関わることは生きがいのになるとし、島民ボランティアの感想をつづっているが、そのほかにはこうした研究は見当たらない。そこで、本研究においては、生活が決して安定しているとはいえない東日本大震災被災者が、なぜボランティアに取り組むのかについて、明らかにし、あわせてその意義について考察を加えていきたい。

2. 研究対象と方法

東日本大震災の被災地の中でもとりわけ被災率が高かったのが岩手県陸前高田市である。同市は市街地の86%が浸水、被災世帯は47.7%にものぼる被害を受けた。筆者らはその同市で絵本読み聞かせボランティア活動(以下、「読み聞かせ活動」とする)を行っている「ささ舟」に着目した。「ささ舟」は2006年より3名で発足し、竹駒小学校を中心に地域子育て支援センター等で活動を行い、同小学校では毎週月曜日の朝に15分から18分、読み聞かせ活動を行っていた。

*1 岐阜経済大学非常勤講師、福祉実習助手

*2 岐阜経済大学准教授

東日本大震災により一旦は活動を休止せざるを得なかったが、2011年6月には同小学校における読み聞かせ活動を再開した。そのほかにも、地域子育て支援センターでの活動を2箇所を増やしたり、「陸前高田災害FM」にて、毎週月曜日に放送されている同市を中心とした岩手県の昔話の朗読番組「いわての昔ばなし」の収録、いわて生協が実施している「お茶っこサロン」での読み聞かせと、活動の幅を広げている。さらに、2012年11月18日付、東海新報の「仮設住宅集会所での『出前おはなし会』にも取り組み始めた」との記事にあるように「出前お話し会」を8箇所こなし、保育所や新たに建てられた施設のこけら落としイベントでも活動を行うなど「ささ舟」は地域に根付いている（写真1）。



写真1 『東海新報』 2012.11.18

同市内の読み聞かせボランティアは、2012年11月現在でも軒並み休止状態にあるところがほとんどであるが、その中において「ささ舟」の活動は際立っているといえる。その「ささ舟」メンバーの中で同意が得られた3人に対して、2012年6月、9月の2回にわたり半構造化インタビューを行った。さらに、この半構造化インタビューで得られたデータを逐語録化したうえで、再度データの収集を行いたい部分について、2012年11月にインタビューを行った。なお、本稿の内容については「ささ舟」メンバーに確認をしていただいた。

この「ささ舟」メンバーの3名（Aさん、Bさん、Cさん）から得られたインタビューデータは、プライバシー保護等の観点から研究に支障がない程度に修正を加えたうえで、3名の被災状況および「ささ舟」活動歴等を表にまとめ（表1）、また、逐語録化したものを「4. 結果」以降に表記した。さらに、「4. 結果」に記載した逐語録は、インタビューから得られた逐語録にコーディングを行い、読み聞かせ活動の再開の要因から、再開後の活動継続の理由に関するデータを取り出し、カテゴリーごとにまとめたものである。

表1 「ささ舟」メンバーの被災状況および活動歴等

	年齢	前職 (主なもの)	震災時の 就業状況	住居等の被災状況	「ささ舟」 活動歴
Aさん	60代後半	保育士	なし	自宅 全壊	4年9カ月
Bさん	60代前半	着付け指導	あり	自宅 損壊なし 生家（市内）全壊 職場（市内）全壊	4年9カ月
Cさん	60代前半	教諭	なし	自宅 全壊 生家（市内）損壊なし	1年8カ月 (震災後)

2013年1月現在

3. 倫理的配慮

対象者には、インタビュー時に書面により研究目的を説明の上、インタビューの同意を得た。その際、インタビューを中止したいときはいつでも中止できること、質問に答えたくないときは、答えなくてもよいことを説明した。

4. 結果

東日本大震災により、活動の中断を余儀なくされた「ささ舟」が、決して生活が安定しているとはいえないなか、(1)なぜ読み聞かせ活動を再開させようと感じたか、(2)再開後、活動が継続できているのはどうしてか、についてどのように捉えているのかを確認できる発言を抽出した。その結果、(1)では、①小学校からの要請、②被災を経験した子どもへの思い、(2)では、①生きがい・居場所づくり、②必要な支援を活用していく心構え、③活動の幅を広げるチャンス、という概念が語られた。以下、順に発言内容を、筆者が特に注目した事項に下線を引いた逐語録(データ)で示し、発言内容の考察を述べる。

(1) なぜ読み聞かせ活動を再開させようと感じたか

①小学校からの要請

【データ】

週1回朝読されて、水曜日に図書館、「ささ舟」ってもともと学校から要請されてできた読書ボランティアなんで、今後も学校の要請に応えられるように。 (Aさん)

一番は校長先生の要望。朝、登校しても親から離れない、学校を休みがち、弁当を食べても吐き出してしまったり、先生の話もうつろに聞いている。学校へきても落ち着きがない。(略)この時期は学校としての機能は果たしていなかったね。それは児童の家族の安否確認に2カ月、先生たちは家庭訪問を繰り返していたから。教

育委員会の職員も出張だった2人を置いて避難所で全員死亡、教育現場が機能できなくて、先生たちも子どもの対応に苦勞してたね。その時期校長は「何をしたら子どもたちが落ち着くかを考えている」って言ってたかな。「読み聞かせで少しでも児童が落ち着くのであれば1日も早く読み聞かせを再開してほしい」と私の仮設住宅に何度も足を運んでは切実な感じで言われましたね。(Aさん)

【考察】

この朝読は1988年に千葉県の高校で始まり、2001年に「子どもの読書活動推進法」が施行され、また、2002年に遠山敦子文部科学大臣の「学びのすすめ」の表明の中で推奨されたことで全国的に広がりを見せたものである。2003年の中央教育審議会資料では小学校において特に読み聞かせをボランティアの活用をとおして実施していくことも明記している。陸前高田市においても2007年度から3年間、「子ども読書プラン」を進め、図書館では「子ども読書プランに基づいた子どもの読書支援活動の推進に向けて各小学校に読み聞かせボランティアを養成し、資質向上も図ろう」との取り組みがなされている(『東海新報』2010.9.21)。朝読、読み聞かせ熱の高まりのなか、2006年に活動を開始した「ささ舟」は毎週の読み聞かせ後には、反省会を欠かすことなく実施したり、市図書館における読み聞かせ講座に参加するなどスキルの向上に余念がなかった。こうした活動を震災前から熱心に行っていた「ささ舟」に「何をしたら子どもたちが落ち着くかを考えている」小学校校長から、「読み聞かせで少しでも児童が落ち着くのであれば1日も早く読み聞かせを再開してほしい」との切実な要請が繰り返しあったことはしかるべきであろう。

②被災を経験した子どもへの思い

【データ】

私がこの写真見て、「そうだ私たちがもさくさくしているときじゃない。子どもたちはもっと苦しんでいる」って思って立ち上がらないといけ

ないなと思ったのがこの写真(写真2)。

(Aさん)



写真2 『東海新報』 2011.4.1

この子どもたちが10年しょっていくんですよ。何にもない街で。それを思うと何もない街で何を学びながら大きくなるのかなと思うじゃないですか。そうすると私たち読書ボランティアの意義って大きいなと思うのね。こころの栄養とすればさ。 (Aさん)

何も考えないで心のそこから笑えるの(絵本)がいい。 (Bさん)

子どもたちの心に寄り添っていくってことが一番ですよ。そして、寄り添って行ってよかったと思われるようなおばちゃん、読み聞かせ団体になれたらいいんじゃないかなと思っています。そのあたりが子どもたちへの意識というところになってくるとは思うんですけど、震災前からはそのあたり子どもに対して変わってきてますかね。震災前は何も考えなかったですね。 (Aさん)

【考察】

Aさんが、『『そうだ私たちがもさくさしているときじゃない。子どもたちはもっと苦しんでいる』って思っ立ち上がらないといけないなと思った』と語った「この写真」とは、2011年4月1日付の東海新報に掲載された写真2である。がれきが街を覆っている背景に笑顔を見せる子どもたちの表情をとらえたこの写真を見て

Aさんは、自らの活動を停滞させてはならない、今後の陸前高田市を担っていく子どもたちの心を和ませる読み聞かせが今こそ必要だと感じた。特に震災後の読み聞かせにおいては、「子どもたちの心に寄り添っていく」ことが、多くを失った中で生きがいになっていることを重視していることが読み取れる。震災から1カ月もたない状況であったことも鑑みると、Bさんの、「何も考えないで心のそこから笑えるの(絵本)がいい」という発言も子どもに寄り添ってこそのものであると捉えることができよう。

(2) 再開後、活動が継続できているのは どうしてか

① 生きがい・居場所づくり

【データ】

だんだんにそういう読み聞かせの話ができて、そしてようやく絵本だけはね、手にとって見られるように。だからここ1年はほんとに絵本しか読まないって言う感じでね、すごく助けられた。なんか使命感っていうと変だけど、与えられた仕事、職場もなくなったしね、子どもの孫の世話もない。だってお母さんだって被災しているからね。仕事がなくなったもんだから、みんな仕事なくてうちにいるんだから、手はあるんだけれども、そんなことくらいしかできないなかで、やれたのがね。 (Bさん)

本は好きで、実は夢は読み聞かせしたかったんです。勤めていたときから。 (Cさん)

予定ってものが全部消えちゃったし、これからもたぶん何の予定もないだろうなって、ほんとうにまっ白、行く末が真っ白になっちゃったんだなと思って。どうやってこれからの月日過ぎていくんだろうってそういう、なんていうんだろう、何もないって言ううつろな感じがすごい強烈だったのね。そのそういう思いをしていたときに、6月のはじめにBさんから「読み聞かせしてみない」って、電話があったときは、ほんとにこう天からなにかが降りてきたような、よかったよやることができて、っていう感じで

すぐ飛びつきましたね。

(Cさん)

(Cさん)

あの念願の読み聞かせのあの仲間入りすることができたということなんです。なんか私はなんていうのかな、読み聞かせで私自身が落ち着いたたって言うか、震災のこころのケアになったというか、私自身がこう助けられたと思っています。(Cさん)

【考察】

震災後には、Bさんの「与えられた仕事、職場もなくなったしね、子どもの孫の世話もない」、Cさんの「予定ってものが全部消えちゃったし、これからもたぶん何の予定もないだろう」との発言からこれまで取り組んできたものがなくなってしまい、先が見えない状況に追いやられてしまったことが読み取れる。その中で、読み聞かせを行うことになった、行うことができたことは今後の日々の生活を見据えるうえで、張り合いを持てる大きな一つの要因となりえたものと考えることができる。さらに、Cさんにとっては夢であった読み聞かせに加わることができるようになったことで心の拠り所ができた。その部分が「私自身が落ち着いた」「助けられた」といった表現となって表れている。このことは一時的ではなく、この先も続いていく見通しが立つことによって感じられるものであることから、活動が継続していくことにつながっていると考えられる。

②必要な支援を活用していく心構え

【データ】

それで小学校ではあの(学級)図書を使っていいですって言われたんですね。(Bさん)

学校はね、あの読み聞かせするような本があんまりないんです。(Aさん)

学校は買わないと思う。年間にいくらっていう予算があって、必要なのをリストアップしてくださいと、例えば教育委員会からくるけど、絵本なんていうのはそうそう書いてやれない。

(読み聞かせは2011年6月)6日からスタートしてはいるんだけど、あのとりあえずスタートしたって感じ。とりあえず立ったって感じだね。かなり無理したね。で、その間に合わせの本をやったんで、子どもたちにいい本を届けられなかったことにほんとに私はね、罪悪感があつてね。(Aさん)

だから低学年だけやったんだよね。(Bさん)

必ずね、自分が個々でやろうと思えばね、助けてくれる人がいるなと、(災害に)遭ったことは不幸だけれど、そのおかげまで人の心みられた1年8カ月だったなと思うのね。私たちオーラが出ていたんだと思うんですよ、たぶん。だから、必要なところからちゃんとこのようにして、たぶん、私たちにそういうオーラが出ていなければね、届かなかった。「ああ、いいです」みたいな、「それ間に合ってますよ」みたいな。そういうことは私はしません。(Aさん)

【考察】

校長からの度重なる切実な要請を受け、「ささ舟」は活動を再開した。被災を免れた学校には学級文庫があったが、本の選定に関しては元教諭Cさんが語るように、「年間にいくらっていう予算があって、必要なのをリストアップしていくなかで、授業に関係する本の購入すらままならない、ましてや絵本までは回らないのが現状であった。そのため読み聞かせに適した絵本は学級文庫にいくらも揃っていなかった。保有していた絵本は津波により流失、陸前高田市図書館も全壊したため読み聞かせに必要な絵本がほとんどない状況であった。この状況では「間に合わせの本をやったんで、子どもたちにいい本を届けられなかった」(Aさん)ため、「低学年だけやった」(Bさん)のが精いっぱいであった。こうしたなかではあったが、「必ずね、自分が個々でやろうと思えばね、助けてくれる人がいる」と思い、活動を続けていくうちに筆

者らより必要となる絵本等の支援を継続的に得る機会に巡り合ったことで、絵本等の物質面はもちろんのこと精神面の安定にもつながったと考えられる。ただ、その機会を活用できたのも先の心構えをしていたからこそであろう。(この

「ささ舟」に対し、筆者らが関わっている団体は震災以来、必要としている絵本を届けたり、読み聞かせ等の技術支援、絵本に関する相談等を受けるかたちで継続して支えている。詳細は表2、小木曾、山田ほか(2012)を参照。

表2 「ささ舟」への支援の経過

2011年 8月下旬	筆者らは8月下旬に市内の高齢者サロン「お茶っこ飲みの会」にて絵本の読み聞かせ等を行った。その際、山田が、参加者に持参していた絵本30冊余の活用先を求めていることを伝えたところ、「ささ舟」のメンバーが参加しており、活用の申し出があった。
9月中旬	筆者らが陸前高田市を訪問した。「ささ舟」メンバーと話し合いの場を持つ。読み聞かせに必要としている絵本が手に入らない現状を把握した。
同月下旬	小木曾より連絡をとり、必要としている絵本のリストを作成し、送付を申し出る。「ささ舟」より絵本約40冊の希望リストが届く。
10月上旬	小木曾が、竹駒小を訪問し、校長も交え、読み聞かせや被災後の生徒の様子等同った。
同月中旬	筆者らの所属団体より、「ささ舟」のメンバーの仮設住宅へ30冊余を発送した。
12月上旬	竹駒小にて筆者らが読み聞かせ等を実施した。「ささ舟」メンバーもその様子を見学した。その際、メンバーより、エプロンシアター、ブラックシアターの要望と約30冊の希望リストを受け取った。
同月中旬	筆者らの所属団体より、「ささ舟」メンバーの仮設住宅へ20冊余を発送した。
	筆者らが行った子育て支援センター「あゆっこ」での読み聞かせを見学した「ささ舟」メンバーより、その際に使用していた紙皿シアターの作製等について、筆者らに学びたいとの依頼があった。筆者らは、「あゆっこ」担当職員に、「ささ舟」メンバーに作製等を教えていただけるよう依頼した。
同月下旬	筆者らの関係者より、「ささ舟」メンバーの仮設住宅へエプロンシアター2種類等を発送した。
2012年 2月上旬	2011年12月中旬に発送できなかったリストの残りの絵本4冊を「ささ舟」のメンバーの仮設住宅へ発送した。
3月中旬	筆者らが同市を訪問。訪問時には要望にそって、時間を設け「ささ舟」メンバーの相談に耳を傾けた。
6月下旬	筆者らが同市を訪問。高齢者福祉施設職員等と「ささ舟」を仲介。子ども以外での読み聞かせ等実施の顔つなぎを行った。
8月上旬	「ささ舟」メンバーに対し、筆者らの所属団体のメンバーが中心となり名古屋市にて読み聞かせ等の研修を行った。

9月上旬	筆者らが陸前高田市を訪問。高齢者福祉施設、「あゆっこ」にて読み聞かせを合同で実施した(写真3)。
2013年 3月中旬	筆者らが同市を訪問し、高齢者福祉施設、「あゆっこ」等にて読み聞かせを合同で実施する予定となっている。

※ 小木曾、山田ほか(2012:99)の表を基に新たな経過等を加筆、修正した



写真3 2012年9月上旬「ささ舟」が「あゆっこ」にて読み聞かせを行う

たのをいいほうに変わろうと思いましたね。

(Aさん)

なんだろう、人生にありえないこの災害じゃないですか。ありえないことが起こっているんですよね。(略) 大きい災害に遭遇してしまったけれども、大きく成長するほうに変えていきたい など思っているんですね。

(Aさん)

支援くださった皆さんのおかげで絵本を充実することができました。遠くから(筆者らに)来て いただいて実技指導していただいたからグループでの学びが充実したと思っています。

③活動の幅を広げるチャンス

【データ】

ただ読んでればいいっていうもんじゃなくて、 大きく成長するチャンス。

(Aさん)

全体を通して私は災害は大きな災害で、あつてはならない災害だけど、これも考えようによつてはね、読書ボランティア「ささ舟」としては大きな成長するときじゃないかなと思ったんで 発想を変えてね。落ち込んでいるんじゃなくて 子どもたちに寄り添うとかそれだけじゃなくて ね、もっとボランティア団体としてもっと大きく成長してもらいたいなと思っています。 一人ひとりが実力つけて大きくなって、そして まあ、みんなとっしょに寄り添っていけるようなボランティア団体になればいいかなと思っています。

(Aさん)

まず一人ひとり仲間もいっぱいになりましたからね。 だんだんに3人でひっそりやってきたのと状況が変わりましたよね。だったらこの変わっ

【考察】

Aさんは、「全体を通して私は、災害は大きな災害で、あつてはならない災害だけど、これも考えようによつてはね、読書ボランティア『ささ舟』としては大きな成長するとき」「大きい災害に遭遇してしまったけれども、大きく成長するほうに変えていきたい」と被災という経験をすることになってしまったが、そのことも成長のチャンスととらえるようになった。そして「子どもたちに寄り添うとかそれだけじゃなくてね、もっとボランティア団体としてもっと大きく成長してもらいたいなと思っています。一人ひとりが実力つけて大きくなって、そしてまあみんなとっしょに寄り添っていけるようなボランティア団体になればいいかなと思っています」との発言から、これまで読み聞かせは子どもに行っていたが、対象範囲を広げることで、ボランティア団体としての幅も広げていけるのではないかと、被災した者同士寄り添っていける機会を創出する一助となるのではないかと考えるようになったということが出来る。これらの

ことから、グループの成長には、「②必要な支援を活用していく心構え」で述べた支援による絵本の充実、実技指導が支えになったと考えられる。

5. まとめ

「ささ舟」メンバーは仮設住宅で暮らすなど生活が安定しているとはいいがたい状況にある。それでも読み聞かせ活動を再開、継続している理由として3点挙げられるのではないだろうか。

1点目は、「周囲の人にとって何らかの役に立ち、他者から必要とされている存在であることを意識できていることは、自尊感情を高め、また、人生の意味や目的を見出すことにおいても、自己受容や他者からの受容感、さらに日々充実感を強く持って生きることにも大きな影響を及ぼしている」(高井 2011: 89) という点である。震災前から朝読等読み聞かせ活動を子どもたちに行っていた「ささ舟」メンバーも震災により大きな被害をこうむったが、小学校からの活動要請を受け、大人以上に苦しい思いをしている子どもたちに対し、読み聞かせを通して「こころの栄養」(Aさん)となるよう活動を始めた。このことにより、「ささ舟」メンバーが他者から必要とされている、受け容れられていると感じたことが、「寄り添って行ってよかったなと思われるようなおばちゃん、読み聞かせ団体になれたらいい」(Aさん)、「私自身が落ち着いたって言うか、震災のこころのケアになったというか、私自身がこう助けられたと思っています」(Cさん)との発言から読み取ることができる。さらに、「ただ読んでればいいって言うもんじゃなくて、大きく成長するチャンス」(Aさん)等の発言は、さらなる読み聞かせの充実を意識しているからこそその発言であると考えられる。

2点目は、同じ被災者同士、住民同士だからこそわかりあえ、被災者が読み聞かせを通して活動する姿を被災住民に示すことで地域に活力をもたらしていると感じている点である。

金子 (1992: 111) はボランティアについて

「困難な状況に立たされた人に遭遇したとき、自分とその人の問題を切り離して考えるのではなく、相互依存性のタペストリーを通じて、自分自身も広い意味ではその問題の一部として存在しているのだという、相手へのかかわり方を自ら選択する人である」としている。しかし、「ささ舟」が読み聞かせ活動を行う対象が被災者である一方、「ささ舟」メンバー自身も同様に被災しているのである。このことから、金子が示すボランティア以上に相手との関わりを選択するまでもなく、「ささ舟」は問題を共有しているといえるであろう。

再開時は小学校の朝読から始めた「ささ舟」だが、2013年1月時点で、「陸前高田災害FM」、「お茶っこサロン」、仮設住宅集会所等へと活動場所、活動対象を広げている。つまり、被災者同士問題を共有していることに加え、その被災者でもある「ささ舟」が力をつけ、読み聞かせ活動をより一層充実していく姿を見てもらうことによって被災地の活力としたいという思いが「ささ舟」メンバーにはあった。その思いが、現状の生活状況であろうとも活動の継続へと突き動かす原動力となっていくのである。

3点目としては、「目標なり目的なり、やるべき先が見えて、時間軸を持ってそれを具体的に考えることができれば、自分自身の人生にも初めて未来が見えるようになるのではないか」(佐々木 2011: 63)¹⁾ という点である。2011年4月、東海新報に掲載された写真2を目にし、「ささ舟」は子どもに対して読み聞かせ活動を再開する使命を感じた。気持ちの落ち込みもありながら、6月には校長からの度重なる要請を受け、「ささ舟」は活動を再開することができた。これ以降7月には不足していた絵本支援の見通しが立ち、活動の機会、対象を拡大している。

震災からしばらくすると、被災者の回復が二極分化するといわれている。それは孤立無援で取り残され感を抱えるパターンと、生活再建が進み、精神的に立ち直っていくパターンである(岐阜県精神保健福祉センター 2011: 9)。「ささ舟」メンバーが後者のパターンをたどること

ができたのは、被災した子どもたちへの思い、校長からの真剣で切実な活動要請があったことが考えられる。

6. 結語

先に述べたように「ささ舟」のメンバーは、読み聞かせ活動を通して他者から必要とされている、受け容れられていると感じることができた。それは、同じ被災者として被災地域の人たちと同じ境遇の中にある「ささ舟」のメンバーの活動が、他の被災者の共感を得て必要とされたらからである。すなわち、被災者である「ささ舟」のメンバーは、読み聞かせ活動を通して、被災者を支え現状を変えていくことで、自身の役割と希望を持つことができたのである。また、他の被災者も、同じ被災者である「ささ舟」のメンバーの活動を見る中で希望を見ることができたのであろう。このような相互の関係性が、被災した状況の中で「ささ舟」メンバーを増やし、「被災地の活力としたい」という思いとともに活動を活発にさせていったと考えられる。

一般的には生活が安定していないことは、生きる意欲を妨げ、それが生活の安定を得るための行動に向かわせないという悪循環を生じさせる。しかし、生活が安定していない中であつても、他者への思いや役割への要請、身近な人からの後押しにより、同じ境遇の人々の役にたつことができれば、それが生きる意欲を生むことになる。そして、その意欲が他の生活が安定していない人々を巻き込んで、生きる意欲を広げていくのである。このことを、本稿では「ささ舟」のメンバーの絵本読み聞かせ活動からみることができた。

お忙しいなかインタビュー、本稿内容の確認に応じてくださった「ささ舟」の皆さまに感謝の意を表すとともに、東日本大震災の被災地復興を願う筆者らとしては、本稿がその一助となれば幸いに思います。

【注】

- 1) 日本赤十字秋田看護大助教・佐々木亮平は岩手県職員として保健所に勤務していたが、2007～2009年度まで、人事交流により陸前高田市に勤務した経験を持つ。東日本大震災直後より、同市に入る。2013年1月時点も被災者の保健医療福祉に関わる専門家として活動を継続している。

【引用文献】

- * 小木曾隆臣、山田武司、日高橘子、児玉陽子 (2012) 「被災地における児童およびその母親への援助活動に対する実践－岩手県陸前高田市における絵本等の読み聞かせ活動への支援と母子保健活動から」『地域経済』第31集、岐阜経済大学地域経済研究所、95-116
- * 金子郁容 (1992) 『ボランティアもう一つの情報社会』岩波新書
- * 河北新報 (2012) 2012年4月14日付
- * 川市幸代、木村早希、大木桃代 (2009) 「ボランティア活動者のコンピテンシーの作成」『生活科学研究』3 1号、文教大学生生活科学研究所、95-106
- * 岐阜県精神保健福祉センター (2011) 『災害時のこころのケア』
- * 佐々木亮平 (2011) 「未来を描きつつ先の見える支援を－陸前高田市での支援活動 (第3報)」『地域保健』第42号第7号、東京法規出版、58-65
- * 高井範子 (2011) 「ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討－青年期から高齢期を対象として」『太成学院大学紀要』第13号、太成学院大学、79-90
- * 東海新報 (2010) 2010年9月21日付
- * 東海新報 (2011) 2011年4月1日付
- * 東海新報 (2012) 2012年11月18日付

【参考文献】

- * 関野彰子 (2001) 「広域ボランティアネットワークの活動－三宅島災害・東京ボランティア支援センターの実践報告 (フィールドレポート)」『ボランティア学研究』第2号、国際ボランティア学会、89-105
- * 茶屋道拓哉、筒井睦 (2012) 「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義」『九州看護福祉大学紀要』第12巻第1号、九州看護福祉大学、25-37
- * 早川和男 (2011) 『災害に負けない「居住福祉」』藤原書店
- * 復興庁 (2012) 「復興の現状と取組」復興の現状と取組 (http://www.reconstruction.go.jp/topics/120611_torikumitogenjo.pdf, 2012. 6. 13)
- * 槇島敏治 (2002) 「心のケア」『医学のあゆみ』第200巻第12号、医歯薬出版、937-940

- * 三浦清一郎 (2010) 『自分のためのボランティア—居場所
ありますか、必要とされて生きていますか』学文社
- * ハツ塚一郎 (1997) 「阪神大震災における既成組織のボラ
ンティア活動—参与観察と聞き取り調査」『奈良大学
紀要』第26号、奈良大学、151-165